

アミーゴ会だより

2012年 7月
(メルマガを改題)
No. 11 : 2012-III



発行人：上原尚剛
編集人：河嶋正之
 鴻巣勝明
事務局：笠井道彦

「私の本棚」紹介

『グアダラハラを征服した日本人』

～17世紀メキシコに生きたファン・デ・パエスの数奇なる生涯～

“El japonés que conquistó Guadalajara”

—La historia de Juan de Páez en la Guadalajara del siglo XVII—

メルバ・ファルク・レジェス+エクトル・パラシオス共著

Melba Falck Reyes y Héctor Palacios

アミーゴ会幹事 森 和重

17世紀初めの江戸幕府初期に、遙かメキシコのグアダラハラ市に数名の日本人が住んでいたこと自体が驚きであるが、その中で実業家として活躍し当時の社会に受け入れられた二人の日本人の数奇な生涯について解き明かそうとしたのが本書である。さらに本書が書かれるに至った経緯も非常に偶発的で、フランス・日本・メキシコの研究者の“知の連鎖”という運命的な出会いから成り立っていると言える。

知の連鎖が生んだ‘発掘’

本書に語られる日本人の主人公ルイス・デ・エンシオ（福地兵右衛門？）とその婿ファン・デ・パエスに付いては、既に2010年の日墨友好百周年の記念行事の一つとしてアミーゴ会が行った講演会シリーズの中で、



「17世紀メキシコに残った日本人」のテーマで林屋永吉元スペイン大使に解説して戴いており、会員の皆さまも記憶にとどめていると思う。

本テーマの切っ掛けは、フランスの歴史学者（グアダラハラ史の研究者）トーマス・カルボが1970年代に、17世紀にグアダラハラで作成された幾つかの公正証書の中にスペイン語と日本語で併記された署名を発見し日本人の存在を知ったことに始まった。追跡研究の結果、二人の日本人パエスとエンシオの数奇な生涯に付いて纏めた論文をスペインの学術誌 *Revista de Indias* に発表した。

1980年代前半にマドリーに赴任された林屋大使がその論文を読み興味を持たれ、ご自身でも調査を始められた。特にエンシオ（福地）が仙台の伊達藩の藩士で、慶長遣欧使節団でメキシコに残留した一人ではないかとまで突き止められた。同大使はその研究成果をグアダラハラ大学で講演する機会を持たれたが、それに強い関心を示したのが、本書の著者の一人メルバ・ファルク同大学教授であった。

ファルク教授はメキシコ・日本の経済関係の研究者で、何回も来日し多数の日本に関する著書もだしている親日派であり、本テーマに熱狂的に取り組むようになった。その熱意が同大学歴史学者エクトル・パラシオ教授にも伝わり、共同執筆者として加わった。二人の研究者により、17世紀にグアダラハラに住んだ二人の日本人を中心にしたその生涯、当時のグアダラハラの社会状況、ひいては太平洋をはさんだ日本とメキシコ（当時はヌエバ・エスパーニャ）の国内事情なども本書で明らかにされている。

二人の日本人：エンシオとパエス

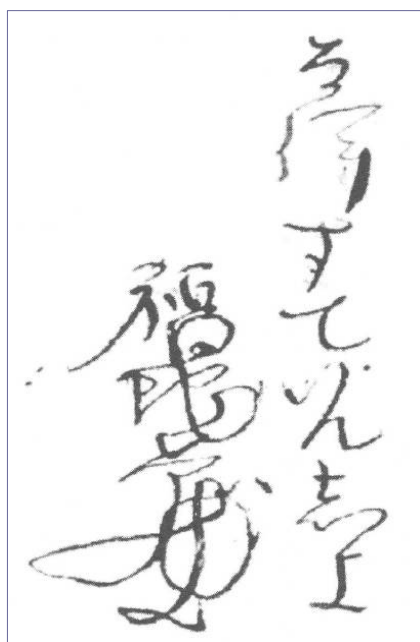
本書の凄さは、膨大な17世紀の遺言書など公正証書を丹念に調べ上げ、日本人に関する古文書を分析して、二人の日本人の当時の生活環境、家庭状況、社会活動、地域社会での地位などを明らかにしていることである。その作業は推理小説の謎解きに通ずるものであり、興味をそそられる。

記録によると、エンシオは1620年前後に25歳位でグアダラハラに住み始め1666年に死亡している。その間、商人として財を成し、結婚して子ども

= 目次 =

- 1.私の本棚紹介：「グアダラハラを征服した日本人」
アミーゴ会幹事 森 和重 ... 1
- 2.メキシコへの誘い：「沙漠の奇跡クアトロ・シエネガス」
メキシコ観光 三輪啓喜 ... 3
- 3.私とメキシコ：「メキシコの神に思う」
日本画家 敬遠藤桑珠 ... 4
- 4.メキシコ・ビジネス事始め：「天日塩田；ESSA」
三菱商事(株) IR部 ... 7
- 5.「催事案内」/「次期大統領にピニャ=ニエト候補」 ...5/6

も持ち、教会の役員を務めるなど、地域社会の実力者として受け入れられていたものと推測される。書類にはスペイン語の署名と“る伊すていん志よ 福地〇〇〇”とひらがなと漢字(編集部注：名前は難読



漢字でヒョウエモンあるいはソウエモンと林屋大使は読解)で併記しており、日本人であることを明らかにしている。林屋大使はエンシオは仙台藩の士族の出自と推定されている。

一方、エンシオの娘マルガリータと結婚したパエスは、同じく1620年前後に10歳位でグアダラハラにやって来

て、1675年に69歳で亡くなっているが、舅のエンシオ以上に実業家として成功を収めると同時に、社会的にはグアダラハラ大聖堂財産管理人とか遺言執行人という公的な立場でも活躍していた、しかし、エンシオと違い、日本人という記録は残していないが、唯一遺言書の中で初めて、日本人で大阪生まれであることを認めている。パイスはマルガリータとの間に9人の子供をもうけており、何代かの子孫の記録も残っている。

17世紀メキシコに渡った日本人

しかし、残念ながらグアダラハラに到着するまでの二人の記録は残っておらず、謎に包まれている。しからば、彼等が17世紀にどのような方法とルートで新大陸のメキシコまでたどりつき、活躍したのであるか？

15～16世紀の大航海時代には、スペイン・ポルトガルによるインド・アジア大陸、アメリカ新大陸への植民地主義的海外進出が行われていたが、日本人も海洋国家の一員として東南アジアを中心に倭寇や御朱印船として進出し、ルソン(フィリッピン)、タイ、ベトナム、バタビア(インドネシア)などに日本人町を形成していた。一方、1565年のアカブルコ＝マニラ航路の発見によりガレオン貿易が始まり、アジアとの貿易が盛んになり、日本との交易も行われていた。

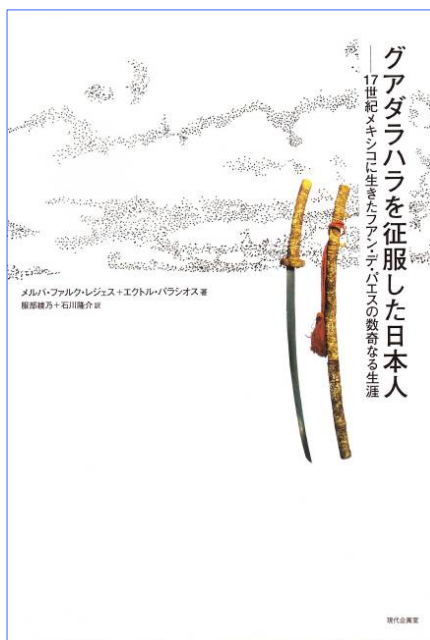
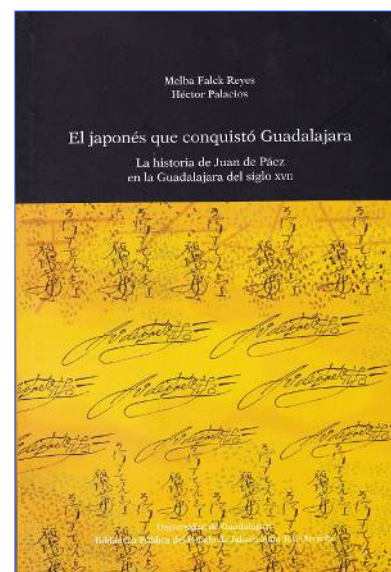
また、1540年代からポルトガル・スペインの宣教師が来日し日本におけるキリスト教の布教が始まり、1549年のザビエルの来日を機に布教が進み、有力大名にも信者が出るようになった。しかし、キリスト教布教を通じてのスペイン人の侵略を警戒

した秀吉が1597年に修道士を処刑した。これにより、キリスト教徒への弾圧が始まり、1612年には、徳川幕府によるキリシタン禁止令が出された。

一方、ヌエバ・エスパンアを通じての交易を望んだ家康は、御宿に漂着したフィリッピン総督ビベロ一行が1610年に帰国する際に23名の商人などを同行させ、1613年伊達政宗の支倉慶長使節団の派遣を認め、1616年サンタ・カタリナ修道士使節団の来日を許すなど、ヌエバ・エスパンアとの交流は続けていた。同時にキリスト教徒弾圧による日本人信徒の海外逃避があり、豊臣・徳川との覇権争いに敗れた豊臣系大名の残党などは東アジアの日本人町に逃れた者も多かったと云われている。従って、グアダラハラの日本人たちの渡航の方法と由来として下記4つの仮説が出されている。

- ① ビベロ帰国の際の同行者が残留
 - ② 支倉使節団の残留者
 - ③ サンタ・カタリーナ修道士の帰国に同行
 - ④ マニラ日本人町経由のガレオン船に乗った日本人キリスト教徒か豊臣配下の武士の残党
- とはいえ、これ以上の謎解きは、本書を読んで解決してもらいたい。

若者の内向き指向が指摘される現在、17世紀に海外で活躍していた日本人が居たことは頼もしいことでもあり、若手の奮起を促す機会にもなるかと思ひ本書を取り上げてみた。また、翻訳が素晴らしく、非常に読みやすい文章になっているので、ぜひ一読をお薦めする。(2012年4月)



(編集部注：本書日本語版は服部綾乃・石川健介の共訳で、2010年12月に現代企画室より刊行。価格2,500円＋税。前ページ写真は去る3月28日、メキシコ大使館で本書を紹介するメルバ・ファルク教授一編集子撮影。)

砂漠の奇跡、クアトロ・シエネガス

メキシコ観光 三輪 啓喜

砂漠のオアシスー旅人の琴線に触れる言葉だと思いませんか。

メキシコの北部は荒涼とした大地に、所々サボテンが自生してる風景が広がります。その中でも、クアトロ・シエネガス(Cuatro Ciénegas)という場所に、神秘の泉があるというのです。

モンテレイ、もしくはコアウイラ州の州都サルティエージョより車で4-5時間のところに、クアトロ・シエネガスの街があります。

この街はメキシコのプエブロ・マヒコ(Pueblo Mágico)に指定されており、中心部はメキシコらしいコロニアル調の街並みとなっています。しかし、この街を一步外にでると、荒々しい砂漠が広がっており、一年の間に雨はどれくらい降るのだろうか？とついつい思ってしまう様な景色です。

神秘の泉

街を出て15分ほど車で行くと、その砂漠の真ん中に透き通った湧き水の泉がいくつも点在しています。その中でも特に美しいのが、ポサ・アスールと



いう泉で、真ん中に行くほど水深が深く、色もエメラルドグリーンから深い青へと変わっていきます。周りの荒野と、驚くほど美しい青の色のコントラストを目の当たりにすると、ついついシャッターを何度も切ってしまうほどの感動です。

そのすぐ隣に、湧き水が小川となって流れている場所があります。

地球の不思議

なぜこのような砂漠に水があるのか？それはメキシコ北部の大自然の驚異の力が織り成す奇跡なのです。空気中の僅かな湿気が、このクアトロ・シエネガスの周囲の山にぶつかり、水分が吸収され、気の遠くなるような時間を掛けて地下水となり、地中で濾過さ

れてやがて地上へと湧き出ているのです。所によっては、天然のプールのような大きさの泉となっており、遊泳を楽しむことができる場所もあります。

石膏の砂丘

さらにこの泉から車で20分ほど走ると、今度は見渡す限り白の世界が広がっています。ドゥナス・デ・



ジェソ、石膏の砂丘です。天然の石膏が砂の山と

なってどこまでも続くこの光景は、世界でも非常に珍しく、アメリカのニューメキシコ州にあるホワイトサンズ国立公園に続いて世界第2位の大きさを誇るそうです。太陽の反射が非常にまぶしいのでサングラスが必要ですが、日本では見ることの出来ない不思議なこの場所では、どこまでも走って行きたくなるに違いありません。ところどころに石膏が固まって大きな岩のような形になっており、登頂すれば小さなお城の上に乗ったような気分になります。

乾燥したメキシコの北部で、地球の不思議を体感できるクアトロ・シエネガス。近年では環境の変化によって泉が枯渇しないように保護活動も行われています。美しいこの大自然がいつまでも続いて欲しいと願うばかりです。(了)

【編集部注：在メキシコ老舗日系旅行3社に交代執筆をお願いしているシリーズの第2回は、(株)メキシコ観光の三輪啓喜さん(<http://www.mexicokanko.com.mx/>)に神秘的なクアトロ・シエネガスをご紹介いただきました。なお、掲載写真2葉は三輪さんのご提供、下の1葉はメキシコの



環境保護団体ウェブ

(<http://www.planetaazul.com.mx/>)から編集部が転載しました】

メキシコの神に思う

日本画家 敬 遠藤 桑珠

【編集部注：アミーゴ会メキシコ代表の遠藤滋哉会員より、本年3月に94歳でご逝去された父君の遠藤桑珠画伯が残された『生き立ちの記(予定稿)』からメキシコに関わる感想文をお寄せいただきました。遠藤会員は「日本での人生、経験、生活が長い人ほどメヒコに強烈な異文化観を持つようです。一人の絵描き、日本画家・桑珠の目から見て感じた“メヒコ観”です」と仰っています。会員の皆様がメキシコ観を重層化する一助になれば幸いです。】

私のこと

(前略) 戦争が終って幾年かが経ち、米沢の実家の百姓からまた絵描きに戻って、乏しい社会経済のなかで時を過ごし、日展の無鑑査になり、会員となり、審査員となり、評議員となり、そして参与となり今日に及んでいる。その後は五風十雨、照る日曇る日もあって日展をはじめ各地の美術館、ギャラリーでの作品展を開いてきたが、それは私の本来の作品を助けるものであって、真の仕事はあくまでも日展発表の作品にあった。これが私としての略歴の一端である。

茲(ここ)で、私の思考を大きく更(か)えてゆくものがある。

昭和46(1971)年、一人息子が19歳のとき、メキシコ国立民芸学校に入った。陶芸科ということであるが、2年余を過ぎてその消息を知るために夫婦でメキシコを訪ねたことの因縁に依るものである。以後10回、通算して200余日各地々々を歴訪した。

〔これに先立つ2年まえ私は同郷山形の友人と二人伴れだつて、北欧からペルシャまで16ヶ国100日の旅行をした。その時の経験を今にかえりみて、国と国としての風土の違い、石の文化と木の文化ということ、麦と米との主食のこと、環境習俗は各々の国土に於いて異なり、言葉の通じないのは元より日々がいつも不自由であった。生水を呑めない国もあり、街のなかでトイレを探すのにも困った。これらのことがいまでも鮮明に蘇って私の作品のなかに大きな影響を与えることになった。〕

しかし、それにも増して前後合せて200余日メキシコ滞在中の見聞と実際に経験した生活とを考えてみると、欧州諸国のどこの国にもないメキシコ独自の、まさに稀有とも謂うべき生活文化の多くに接したことである。自国日本では到底味わい得ない驚異の数々であった〔これは従来の私の考えを大きく変えていった〕。

メキシコ200余日：マヤを生きる

マヤの児には皮膚に青い斑点(蒙古斑点)がある。遡ること太古、氷のベーリング海峡をマンモスや獣と共に渡り南下した遊牧の民の子孫にいまも残る亜細亜系の「血」の痕跡である。

マヤは髪も鬚(ひげ)も黒い。眸(ひとみ)も黒い。背丈も日本人とほぼ同じ。主食はトーマロコシである。性格はまことに温良従順で、陽気で毎日の仕事はその日その日で翌日に残さない。「明日またネ」である。

しかし、マヤは頑固に種族の純血と生活原語を守り土を離れない。例を挙げれば、靴を履き、背広を着て、鞆を持って街に出ればもはや既にしてマヤではない。

マヤはあくまでも跣(はだし)で裸で土を踏み野にあつて、豊穡な木の実、草の実を食い、牛と山羊とを飼い、樹海のなかで全くの原始さながらの生きかたを生きてゆく。あたかも、文明をいさぎよく拒否しているかに見える。この事は一部マヤの種族にいまも残るということである。

マヤはトーマロコシもサトーキビも輪作をせず、一度植えたら4、5年はそのまま自生発芽を待つといい、天道に従ってその恵を得るといふ、まこと羨む自然体である。木の皮をなめして作った紙に原色で動物の絵を描く“アマテ”という民芸品がある。窯を作らず土の上にそのまま積み重ねて野焼きで創る土器など、まことに楽天的である。彼等には明日は晴れだ、陽はまた昇るといふことであろうと思われる。

私は前後してメキシコを歴訪中に何回かに分けてマヤの国ユカタン半島の原野に行った。ユカタンは海拔ゼロ地帯が多く、石灰岩地層で雨は地に沈み野に河川がない。マヤ遺跡の数々は州都メリダを中心に残っている。

メキシコ200余日：邪教か魔教か真教か

チチェン・イツア、ウシュマル、カバーなど幾何学的な構築を幾十段もの高さに積みあげ、古くは800年の風雨に耐えているという。ピラミッドの王墓、石の祭壇、天文の塔など、太陽のもとに将にサンサンと輝く遺跡の国メキシコである。人々は神に向って歓喜して祈りを捧げ、赤い血を滾(たぎ)らせ、一身尊崇の真を誓う。それは熱狂的というばかりである。そして民族の祭典として、異状なまでの血の儀式を行う。その一つには或る勇壮な競技を熱闘して勝者となった組の主将が自らの心臓を生きながら神に捧げるといふ儀式があった。或いは又、二つとない若き乙女の命を疑うこともなく、眼くるめくような深い淵に身を沈めた“セノーテ”の泉。来世は必ず神に召される、死は蘇るといふ「贅(いけにえ)」の思想。至純無垢、天晴れな死生観、宗教観であるかもしれないけれども、身震いするような数々の儀礼を神の名のもとに、これを許すのか。神とは何か。私には判らない。いま以つてその真意とするところが理解出来ないで居る。

「マヤ暦」として一年を360日までを刻み、残る5日間を「闇の日」として新年を迎えたという文明文化の栄えた国家に於いて、世に在りとする神とは何か。神に生身の贅を捧げる教義とはなんであるのか。「太陽の神」とも謂い、多くの民と民とを抛らしめる根本の神儀とは何か。邪教か、魔教か、真教か。そのことについて幾度聞いても、私にはどうしても理解することが出来ない。

処所に点在する遺跡にあって、いまも残る「チャック・モール」と呼ぶ古代マヤの貌をかたどった像があり、身を横たえた腹に置かれた皿の上に贅の心臓をのせるものであって、雨露の風化に耐えているのを見ることが出来る。それは一つばかりではなくて多くの遺跡に残っている。また「トラロック=チャック」という雨の神をかたどった巨大な石像も残っているから何処かには「風の神」というものも在るだろうと思う。みな宗教の神事に関わるものである。これらのことを振り返ってみて、私は「死ということ」、「生きるということ」の意味に惑いながら祖国日本に帰った。

メキシコは広さに於いて日本の5倍以上もの領土を持つ国である。そして四季を通して豊かに稔る天然に恵まれた国である。しかしそれが過去に於いて数々の痛ましい試練があって今日に及び、言うべき歴史を繰り返した上に立って、尚人々は何事もなかった如くに晴々とした天空の下に、平和に日を迎え、日を送っている。

こうしてみると、太陽をはじめ、万象を神として、針一本にも、木の葉一枚にも、野にころがる石ころにも風と共に神があって、それぞれに祈りながら生きてゆくのかと思ったりする。そして、しばらくの年月が過ぎてみると、今日に於いて日々私が行っている仕事にも密接に係っている事柄でもあり、又は関ることのない時もある、それはそれとして幸せであり、或る時には悲しみであるかとも思っている。(後略)(了)

【編集部注：遠藤桑珠画伯の作品は「伝国の杜・米沢市上杉博物館」の追悼特別展示案内ウェブ(下記)で公開されています。
(<http://www.denkoku-no-mori.yonezawa.yamagata.jp/067soujuhorin.htm>)。この追悼特別展示はアミーゴ会メルマガでもご案内済みです。ご観覧された会員もおいでと存じます。なお、小見出しは編集部が付しました。】

追悼 特別展示

米沢が生んだ日本画の巨匠

遠藤桑珠

大正 6年 米沢市上郷生まれ
昭和51年~ 日展審査員
昭和63年 日展評議員
平成 6年 日展委員
平成17年 米沢市功績者
平成23年 12月26日逝去(94歳)

福王寺法林

大正 9年 米沢市美生生まれ
昭和25年 第1回 日本美術院同人
平成 6年 日本美術院会員
平成15年 文化勲章
平成16年 米沢市長兼市民
平成17年 山形県名誉市民
平成17年 三鷹市長兼市長
平成24年 2月21日逝去(91歳)

2012年
3/10(土)~4/8(日) **入場無料**

開館時間: 9:00~17:00(入館は16:30まで)
3月: 毎週月曜休館 4月: 休館

米沢市は、遠藤桑珠氏と福王寺法林氏という日本画の巨匠を相次いで失いました。両氏の偉大な足跡と米沢への思いを所蔵作品からたどる追悼の展覧会を急遽開催いたします。時節柄ご多忙のことと存じますが、是非ご来館いただき、亡きお二人を偲んでいただければと存じます。

両氏のご冥福を心からお祈り申し上げます。

伝国の杜 米沢市上杉博物館

〒950-0002 山形県米沢市丸の内1-2-1 TEL: 0239-26-6001 FAX: 0239-26-2000
<http://www.denkoku-no-mori.yonezawa.yamagata.jp>

夏のメキシコ催事案内

~メキシカンビートで猛暑を楽しもう~

アレグリア・デ・メヒコ 2012@横浜

Alegria de México Yokohama 2012

会期: 8月11日(土)~12日(日) 入場無料

会場: 横浜赤レンガ倉庫前広場

第3回アレグリア・デ・メヒコのメインは土曜の夜のプロジェクト



ンマッピング! 今年もマヤカレンダーがテーマ。8/11の夜、時空を越えて古代マヤ文明のメッセージが赤レンガに届く。メキシカンミュージックで会場がダンスフロアに! ノルテック・コレクティ

ブがTenorionにVJを加えバージョンアップして再登場! カラフルでかわいいメキシカングッズやおいしいメキシコ&日本コラボメニューも楽しみ!

☆公式サイト: <http://www.alegriademexico.com/>

☆横浜赤レンガ倉庫催事案内:

<http://www.yokohama-akarenga.jp/event/index.html>

フィエスタ・メヒカーナ 2012@お台場

Fiesta Mexicana 2012 in Odaiba-Tokyo

会期: 9月15日(土)-16日(日)-17日(祝) 入場無料

会場: お台場ウエストプロムナード



第13回フィエスタ・メヒカーナはメキシコ・パワーを結集! 今年も9月の3日間、お台場がメキシコになる。音楽や舞踊、物

産や食文化等様々な角度からメキシコをまるごとご紹介。メキシコ大使館を中心に日墨交流の輪を広げる毎年恒例のフィエスティバル。メキシコ関連の企業やレストラン、物販等の店舗が出店。最終日にはメキシコ旅行が当たる大抽選会も開催。

☆公式サイト: <http://www.fiestamexicana-tokyo.com/>

フィエスタ・メヒカーナ大阪 2012

会期: 9月15日~17日

会場: 新梅田シティ・ワンダースクエア

日本とメキシコの友好を深める市民レベルの交流の場。今年もマリアッチ演奏をはじめ民族舞踊やメキシコを代表するアーティストがライブ出演。手工芸品やアクセサリ、タコスなど飲食を楽しめるコーナーを展開。

☆案内サイト:

http://www.osaka-info.jp/jp/search/detail/event_7727.html

アミーゴ会懇親ゴルフ秋期大会

日時: 10月16日(火) 09:00 集合

場所: 清川カントリークラブ

<http://www.kiyokawa-cc.jp/>

申込期限: 8月30日(木)

申込先: 日笠幹事(t-hikasa@g03.itscom.net)

詳細: 7月23日付けアミーゴ会メルマガ参照

担当幹事: 日笠 徹・南郷茂伸・鴻巣勝明

次期大統領にエンリケ・ペニャ=ニエト PRI 候補

～PAN 政権の 12 年に有権者の厳しい評価～

アミーゴ会 幹事 河嶋正之

メキシコの大統領選挙が 7 月 1 日に行われ、野党 PRI(制度的革命党)のエンリケ・ペニャ=ニエト(Enrique Peña Nieto)候補が勝利し、12 年ぶりに PRI が政権を奪還した。PRI は 71 年に及ぶ長期政権を担ったが、2000 年選挙で PAN(国民行動党)に敗退し下野していた。また、同時に行われた上下両院議員選挙でも PRI は第 1 党となったが、連合を組む PVM(緑の党)と併せても過半数には届かなかった。新政権は 12 月 1 日に発足する。

ペニャ=ニエト PRI 候補が終始リード

大統領選挙戦は 2012 年 1 月に開始され、政権与党の PAN(中道右派)は元教育相のホセフィーナ・バスケス=モタ(Josefina Vázquez Mota)女史を党内予備選挙で統一候補に擁立した。メキシコ初の女性大統領誕生への期待も大きかったが今ひとつ国民の支持が伸び悩み、得票率 25.41%で第 3 位に甘んじた。

選挙戦では終始、PRI(中道)のエンリケ・ペニャ=ニエト前メキシコ州知事がトップを独走し、幅広い支持を集めて得票率 38.21%で当選した。

2006 年選挙で 0.6%の僅差で次点だった PRD(民主革命党;中道左派)の AMLO ことアンドレス・マヌエル・ロペス=オブラドル(Andrés Manuel López Obrador)元メキシコ市長は、終盤の追い上げも及ばず、得票率 31.59%と今度も次点に泣いた。



(出所: Notimex ウェブより転載)

PRD は前回選挙後、選挙裁判所の有効決定を不服としてレフォルマ通りを長期占拠した。今回も不正の横行を理由に選挙無効を訴えているが、票差が 6.6%あり 9 月初旬の同裁判所の判決が如何様であっても大きな騒動はなからう。新潮流として、学生グループが過去の利権政治の復活を嫌い、PRI 復権を阻止する「私は第 132 番目」運動を展開し PRD に若人票が流れたとされる。

ペニャ=ニエト次期大統領は 1966 年生まれの 45 歳。メキシコ州知事を 2005～11 年まで務め、同州の政治家としては高名だが、国会議員や連邦閣僚の政治経験がなく、国家指導者としての政治的手腕は未知数だ。

新しい国づくりへの国民の期待

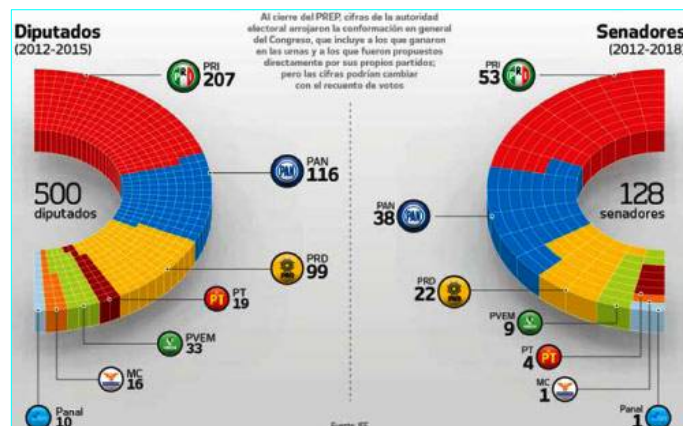
PAN と PRI が公約として掲げた経済政策に大きな違いは無く、アジアとの経済関係を重視する経済開放・貿易自由化の推進、エネルギー・税制・労働分野での構造改革の取組み姿勢は一致している。国民の負託に応えるための、政府と議会との良好な関係構築に向けた今後の政治的努力が注目される。

政権与党候補の大敗の背景には、PAN 政権下での低成長(2001～12年ⅢQの年平均GDP成長率2.12%)、失業率の高止まり(5%近傍)、実質賃金の低迷(6年間で2.16%増)など、実体経済の成果が芳しくないこと、さらにカルデロン大統領は国軍をも投入して麻薬組織撲滅に取り組んだが、累計 5 万人余の死者を出した治安の悪化がある。こうした状況下、国民が日常的な生活の改善を実感できず、PRI か PRD かの選択肢から新たな変革の道を選択したと指摘される。

なお、「麻薬戦争」は現状分水嶺にあるとみられるが、ペニャ=ニエト次期大統領は選挙戦中、軍隊ではない新しい警察組織による市民の安全確保の優先を強調しており、最終決着に向けた前進が期待される。

国会:少数与党政権で PRI+PAN 連携が課題

上下両院議員選挙では、PRI は PVEM(環境緑の党)との連立候補を立てて臨み、獲得議席数は上下両院で第一党となったが過半数には及ばなかった。PAN は上院で第二党、下院で第三党となり、PRD は PT(労働党)と MC(市民連合)と左派連合を組み、上院で第三党、下院で第二党となった。



(出所: El Universal ウェブより転載)

メキシコでは長年、エネルギー・税制・労働の 3 分野での構造改革は国家の共通課題と認識されている。PAN 政権下では下院第一党の PRI が改革法案に反対したが、今回 PRI 幹部は社会改革推進を改めて公言している。8 月の党大会で選出される PAN 執行部の構成次第では PRI との連携もあり得るとされ、改革の進展が期待される。(了)



世界最大の天日塩田を運営する製塩会社

～ Exportadora de Sal, S.A. de C.V. (ESSA) ～

三菱商事株式会社 IR 部

【編集部注：今回は三菱商事 OB の山形純夫会員のお世話で、同社の個人投資家・個人株主向け広報誌“MC magazine”の2010年3月号(三菱商事 IR 部発行)より、日墨合弁製塩会社 ESSA の記事を転載します。「メキシコと日本が結婚した」と時のロペス・ポルティエーヨ大統領が評した ESSA の誕生秘話から地域社会と共生して成長を続ける姿をご紹介します。なお、本誌への転載と体裁の変更とをお許し頂いた発行元のご理解にお礼を申し上げます。】

地域に深く根を下ろし日本とメキシコの友好の象徴に

地域に根ざした取り組みを推進し、日本とメキシコの友好の象徴と称されるまでに大きく成長した、ESSA の足跡を紹介します。1973年、Exportadora de Sal, S.A. de C.V. (ESSA)は、三菱商事とメキシコ政府の合弁製塩会社としてスタートを切りました。生産量は、設立当初の年間 450 万トンから 750 万トンに増加し、日本をはじめとするアジア、アメリカなどに、純度の高い高品質の塩を安定的に供給しています。

出荷量(累計)は全世界の一年分の消費量に匹敵

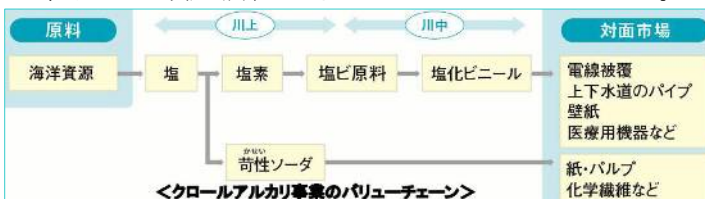
メキシコの北西部、太平洋に突き出たバハ・カリフォルニア半島の中央部に位置するゲレロ・ネグロ。この町に世界最大の天日塩田があります。この塩田を運営しているのが、三菱商事とメキシコ政府の合弁製塩会社 Exportadora de Sal, S.A. de C.V. (ESSA)です。年間を通じて極端に少ない降水量、降り注ぐ強い日差し、吹きつける潮風。天日塩をつく



結晶池での採塩風景

るのうってつけの条件がここにはそろっています。

塩の生産は、天候に大きく左右されるため、ESSA 以外の塩田は歴史的に数年に一度、出荷制限を繰り返しています。しかし、安定した天候に恵まれる ESSA は、1950 年代の塩田立ち上げ以降、一度も天候による出荷制限を行うことなく運営を続けています。2003 年、出荷量は創業以来の累計で 2 億トンに到達。これは、全世界の一年分の塩消費量に匹敵します。今では日本の輸入量の約半分を供給し、クロールアルカリ事業(下図参照)を支える製塩会社として確固たる地位を築いていますが、これまでの道のりは、決して順風満帆なものではありませんでした。



注：クロールアルカリ事業とは、塩を分解することによって、塩素や苛性ソーダ(水酸化ナトリウム)など、工業製品の基礎原料を生産する事業です。

日本の化学工業の発展に貢献するために

1960 年代後半以降、化学工業の急速な進歩に伴って、世界各地において従来とはけた違いの量の塩が

必要になりました。塩は化学工業に必要な不可欠な基礎原料で、日本国内でも需要が急増。年間の輸入量は約 600 万トンに達していました。三菱商事では十年先、二十年先を見据え、安定的かつ大量の塩を確

暮らしを支える塩

日本の塩の消費量は、年間約 900 万トン。塩は食卓に最も身近な調味料ですが、食用に使われる量はこのうちの 2 割弱で、工業用(クロールアルカリ事業用)の消費量が全体の約 8 割を占めています。塩を分解して生産された塩素はパイプや壁紙の材料となる塩化ビニールなどの原料に、苛性ソーダは主に副資材として、紙・パルプや化学繊維、アルミナ(アルミニウムに製錬される前の中間生産物)の製造をはじめ幅広い産業で使われ、わたしたちの暮らしを支えています。

保することが、日本の化学工業の貢献につながると判断。1969 年、プロジェクトチームを立ち上げ、まずオーストラリア西部エクスマウス湾沿岸に一大塩田を開発する計画に取り組みました。全社的な支援体制の下、プロジェクトは順調に進展。塩田用の堤防も一部出来上がり、ポンプなどの機械類も導入され始めていました。ESSA 売却の話がもたらされたのは、その最中のことでした。

「米国 National Bulk Carriers 社 (NBC) は、ゲレロ・ネグロ塩田を手放す意向あり。関心ありや否や」。三菱商事のニューヨーク事務所から東京本社に送信されたテレックス。プロジェクトチームのメンバーは早速ニューヨークに飛び、NBC と初めて会談しました。ただ、この段階ではあくまでもオーストラリアでの塩田開発が本線だったため、ゲレロ・ネグロ塩田の買収に関心があることを表明するにとどめ、メンバーは帰国の途につきました。1971 年 8 月 16 日(米国時間 8 月 15 日)。奇しくもこの日、世界を揺るがす出来事がありました。ニクソン・ショックです。



日本での積み替え基地
三ツ子埠頭(広島県)

事態は急変しました。それまでの1ドル=360円という固定相場制が崩壊し、世界経済の混乱は必至でした。オーストラリアのエクスマウス塩田開発に必要な資金は3,300万ドル。変動相場で揺れ動くさなか、建設費用の見通しがつかなくなり、エクスマウス・プロジェクトは再検討を迫られたのです。

全くの新規プロジェクトであるエクスマウス塩田と、すでに稼働し、実績と確立されたマーケットがあり、さらに世界一の品質を誇るESSA。エクスマウスを続行すべきか、ESSAに転ずるべきか――。激しい議論が重ねられた末、エクスマウス・プロジェクトは凍結され、ESSA買収プロジェクトが進められることになりました。経済環境が不透明化する中で、三菱商事にとってリスクを最小限に抑える、最善の方法だったのです。



困難を極めたNBC、メキシコ政府との交渉

こうしてESSA買収交渉がスタートしたものの、NBCが提示した売却条件は厳しいものでした。まず交渉開始に当たって50万ドルの保証金を要求されました。これは、交渉が不成立の場合は、情報提供の対価として50万ドルはNBCが取得するというもの。さらに、契約の土壇場になって、塩専用特殊船3隻の長期傭船という条件が飛び出しました。長期間にわたり船腹を保有するリスクは、三菱商事にとってほとんど未経験のこと。1971年9月、結局交渉は最終段階で無期延期となりました。

一時は交渉決裂の危機に見舞われたものの、担当者の粘り強い努力が奏効し、当初開きがあった買収価格も両者の歩み寄りで決着。1973年4月、2年半の歳月を費やして、ついに契約調印にまでこぎ着けることができました。

もう一つ、ESSA買収において大きな壁となったのが、メキシコ政府の許可取得です。交渉段階において、1%でもいいからESSA株式をメキシコ政府に寄付しないかとの示唆があり、その後さらに許可条件として、鉱山庁に対して株式の5%寄付と20%の買い取りオプションを付与せよとの要求がありました。熟慮の末、三菱商事は「ESSAの円滑な運営のためには、メキシコ政府との友好関係の維持が不可欠」と判断。この要求に合意し、許可を取得しました。こうして1973年10月、ESSAは三菱商事と

メキシコ政府のジョイントベンチャーとして新たなスタートを切ったのです。

ESSAの歩み

- 1956年:設立
- 1973年:三菱商事とメキシコ政府の合弁製塩会社発足
- 1976年:ESSA株式譲渡完了
- 1981年:社名がExportadora de Sal, S.A. de C.V.と変更
- 1984年:サリトラレス計画(生産能力550万ト/年から700万ト/年への増設)に着手
- 1987年:塩出荷量累計1億トンを達成
- 1988年:ESSA本社がゲレロ・ネグロへ移転
- 2000年:アメリカの野鳥保護団体「WHSRN」より国際的重要保護指定地域に選定
- 2011年:出荷量累計2.5億トンを達成(日本向けが約半分)

事業内容

三菱商事とメキシコの鉱業振興局(Fideicomiso de Fomento Minero (FFM))を株主とする合弁事業です。ESSAの塩田は約750万トンの生産能力を持ち、太陽エネルギーを利用して海水を蒸発させる天日製塩という環境にやさしい製造方法により生産しています。

三菱商事は事業開始に当たって、投資先の国益に配慮すること、そのためには経営は基本的に現地の人にゆだね、三菱商事は世界的なネットワークを活かして販売面で協力していくことなどを基本方針に掲げました。1976年にはメキシコ政府にさらに26%の株式を譲渡し、持ち株比率はメキシコ政府51%、三菱商事49%となりました。また、塩輸送の合弁会社も設立し、ESSAは名実共に生産から輸送まで、メキシコ政府との共同事業となったのです。

その後、メキシコ塩の経営・販売は順調に推移し、日本・メキシコ合弁事業のモデルケースといわれるほどになりました。1994年と2002年の二度にわたって、ESSAはメキシコにおける輸出企業の模範例として、「メキシコ最優秀輸出企業」の表彰を受けています。



塩田には110種類の野鳥が集まる

1976年から82年までメキシコ大統領を務めたロペス・ポルティエーヨ氏は、このプロジェクトを評して、次のように述べています。「ESSAは両国合弁事業の模範例であり、メキシコと日本が結婚したようなものである」。

地域社会との共生が成長の原動力に

ESSAでは塩田事業の推進に当たって、常に周辺の生態系に配慮した取り組みを進めています。具体的には、汚染の防止、自然資源の保護、文化の育成の3項目をポリシーに掲げ、環境と調和した持続可能な開発(Sustainable Development)

を地元コミュニティと共に実現してきました。

2000年9月、ESSAはアメリカの野鳥保護団体「WHSRN (Western Hemisphere Shorebird Reserve Network)」により、国際的重要保護指定地域の一つに選ばれました。これを機に、塩田に集まる鳥の種類や個体数の調査、ミサゴやハヤブ



野鳥保護の止まり木

サの繁殖期の観察、巣づくりの場所の維持や保護など、WHSRNへの活動に協力するだけでなく、コヨーテなどの被害から鳥たちを守るために約200本の「止まり木」を建てるなど自然環境の保護に努めています。



陽光にキラキラと輝く白い結晶池

塩田のあるゲレロ・ネグロ地区周辺には、現在約950名のESSA従業員が暮らしており、三菱商事の駐在員以外はすべて現地のスタッフで構成。塩の生産、運搬、船積みなどの仕事はもちろん、必要な機械や車両、設備の修理や製作に至る大半の作業に、地域住民が携わっています。ESSAを核として、従業員やその家族が暮らす町が生まれ、学校、病院、教会や商店などの生活施設が整備されました。その中には、ESSAが経営するスーパーマーケットもあります。こうして発生したさまざまな雇用も、地域社会の安定に貢献しているのです。



◇ESSAの塩ができるまで◇

くみ上げた海水を蒸発池に導入



飽和塩水にまで蒸発・濃縮

ポンプで結晶池に運び入れる

約半年後、出来上がった12~16cmの塩の結晶層を採取

洗浄

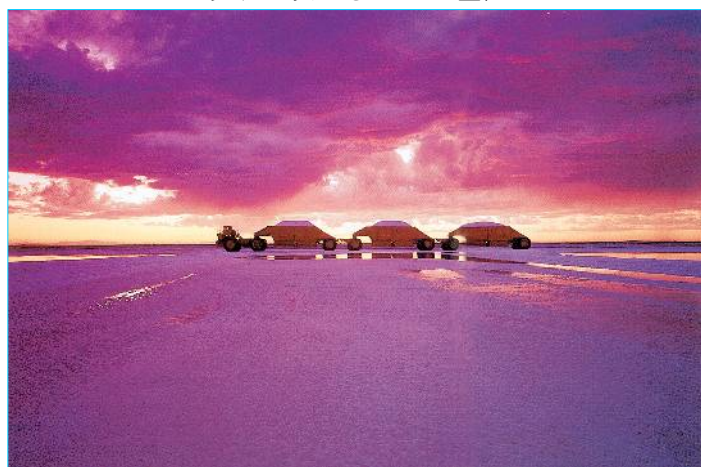


貯塩場で水分を除去

純度の高い塩化ナトリウムの美しい塩が完成



<夕日に映える ESSA 塩田>



本業である塩田事業への取り組みはもちろん、自然環境への配慮や雇用創出への貢献など、地域と密着した取り組みは、ESSAの着実な成長につながっています。日本とメキシコの友好の象徴として、これからも高品質な塩を安定的に供給し続けます。(了)

＝あとがき＝

暑中お見舞い申し上げます。『アミーゴ会だより第11号』も会員諸氏からのご投稿で読み応えのある充実した内容となりました。今年も横浜が8月に、お台場と大阪が9月に、メヒコに大変身。猛暑克服にはメヒコ浸け!!ですね。他方、メヒコDF族の根城「ホテル日航メキシコ」が5月19日、「ハイヤットリージェンシーメキシコシティ」に変身し開業しました(約1億9千万円で売買：草創記を本誌第6号/第8号に掲載)。また、本誌第10号に玉稿を寄せられた黒沼ユリ子さんが6月末、主宰するバイオリン教室「アカデミア・ユリコ・クロヌマ」をメヒコ国内事情の変化で閉鎖されました。何事も変身は新しい出発への一過程。大変身に向け脱皮し続ける努力が肝要ですね。なお編集人の事情で一ヶ月遅れの発刊となりお詫びします。次の第12号(2012年10月)へのご投稿を待ちます。猛暑ご自愛。[か20120803]